

初任保健体育科教諭が抱える 保健授業についての悩み事に関する質的研究

— コロナ禍による影響を踏まえて —

松本 佑介・白石 智也¹
(2023年10月6日受理)

A Qualitative Study of Novice Health and Physical Education Teachers' Concerns about Health Classes in Light of the Impact of the Coronavirus Pandemic

Yusuke Matsumoto, Tomoya Shiraiishi

Abstract: The purpose of this study was to clarify the actual concerns about health classes harbored by novice health and physical education teachers by using a qualitative research method. The participants were four health and physical education teachers who had just commenced working as such. A semi-structured interview survey was conducted with them, and SCAT was used as the analytical method. The results of this study revealed the following three points. (1) Novice health and physical education teachers faced challenges to stimulate students' interest, and to set the central theme of the class by an introduction apposite for "proactive learning" in class. (2) Novice health and physical education teachers experienced problems with "interactive learning" in health classes, especially during the coronavirus pandemic, and dialogue between students and between students and teachers suffered. (3) Novice health and physical education teachers had problems with the introduction of the class, the setting of the central theme of the class, and an environment that enabled students to acquire knowledge, as in "authentic learning," in the health classes.

Key words: novice teacher, concerns, health classes, SCAT

キーワード：初任者、悩み事、保健授業、SCAT

I 緒言

現在、学校教育において、教員^{注1)}の資質能力^{注2)}向上及び教育内容の更なる充実が求められている。この背景には、子どもたちに対し、現代社会の急速な変化に対応するための資質・能力を身に付けさせることの重要性が挙げられる(長岡, 2020)。とりわけ体育科・保健体育科においては、教員の資質能力向上に直結させるべく、これまでに、教育実習生及び教員が抱える体育授業に関する心配や悩み事に関する研究が行われ

てきた(例えば、加登本ほか, 2010, 2011; 木原ほか, 2003, 2004)。これらの先行研究では、体育科・保健体育科の教育実習生、並びに、各学校種で体育授業を担当している教員が、体育授業について心配していることや悩んでいることを手掛かりとして、その支援の方策について検討されている(加登本ほか, 2010)。

一方で、保健体育科は体育と保健の合科であるものの、保健については研究上の関心があまり集まっていなかった(野津, 2020)。他方で、学校現場においては、体育授業に比べて、保健授業に対する苦手意識を持っている教員が多く(中川・高橋, 2010)、教員への保健授業に関する支援は、保健科教育学における最も大

¹National Sports Council of Tanzania

きな課題の1つであるとされている(上地, 2020)。したがって、保健体育科教員の保健授業に関する悩み事の実態を調査する研究、並びに、その支援の方策を導き出す研究の価値は高いと思われる。

数少ない保健授業の悩み事に関する研究として、加登本・辻(2020)及び岩田ほか(2012)が挙げられる。加登本・辻(2020)は、小学校教員が保健授業について、どのような事項に困難を抱えており、また、その解決のためにどのような方法をとっているのかについて検討している。また、岩田ほか(2012)は、中学校及び高等学校の保健体育科教員が保健授業や体育授業を行う上で、どのような事項を悩み事と捉えているのか、また、それらの悩み事をどのように解決しようとしているのかについての現状を明らかにしている。

しかしながら、これらの先行研究はいずれも、質問紙を用いて定量的な調査を実施した上で展開された研究であり、教員が抱える保健授業についての悩み事に関する一般的な傾向を把握することにとどまっている。木原(2006)は、教員が抱える課題について、学校や同僚教員によって多様であるため、対象に共通な一般性よりも、対象の多様な特質を把握することの重要性を指摘している。この指摘を踏まえると、「研究対象の有する具体性や個性や多様性を通して一般性や普遍性に迫る」(大谷, 2019, p.29)質的研究を用いて、個々の教員が有する保健授業についての悩み事に関する実態を導き出し、事例研究として知見を蓄積していくことは有意義であると考えられる。

また、近年の教諭の大量退職・採用の影響により、若手^{注3)}教諭が増加しており(山田ほか, 2020)、若手教諭の力量形成は、学校現場における喫緊の課題である(中妻, 2021)。その中で、吉崎(1997)は、特に新規採用1年目について、教員生活において最も成長する時期であると同時に、最大の危機に直面する時期であるとしている。したがって、初任教諭が抱える悩み事の実態を把握する研究の実施は、特に重要であろう。

加えて、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、2020年2月末から全国的な一斉休校を余儀なくされた。小村(2020)は、コロナ禍において学校現場が抱える不安や問題を共有することの重要性を指摘しているが、このような未曾有の状況における初任保健体育科教諭の悩み事を資料として残すことによって、今後、同様の非常事態が生じた場合における、支援方策の検討に寄与することができると考えられる。

そこで本研究では、初任保健体育科教諭が抱える保健授業についての悩み事の実態を、質的研究法を用いて事例的に明らかにすることを目的とした。また、新

型新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を加味した上で調査・分析を実施し、コロナ禍において新規採用された教諭特有の悩み事についても導出することを目的とした。

II 方法

1. 分析の視点

現在、学校現場においては、平成29・30年告示学習指導要領の趣旨に則って、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編(文部科学省, 2017)において、「主体的・対話的で深い学び」は、以下の通り解説されている。

まず、「主体的な学び」とは、「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」(p.78)ことを指している。また、「対話的な学び」とは、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」(p.78)学習を意味する。そして、「深い学び」とは、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」(p.78)学びを指す。

無論、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は、保健授業においても例外ではない(野津, 2020)。加登本・辻(2020)において、小学校教員が抱える保健授業についての悩み事のうち、「主体的・対話的で深い学び」の実現やそれにつながる学習活動の組織・教材の工夫が全体で最も高い割合だった。このことを踏まえると、「主体的・対話的で深い学び」の実現における、初任保健体育科教諭の保健授業についての悩み事を明らかにする意義は大きいと思われる。以上を踏まえ、本研究では、「主体的・対話的で深い学び」を分析の視点として据え、調査及び分析を実施した。

2. 対象者

対象者はX県内の中学校及び高等学校に勤務する、初任保健体育科教諭4名であった(表1)。なお、「若手」の定義にも当てはまるように、非常勤講師経験も含めた教員歴が5年以内の者を対象者として選定した。

表1 対象者の概要

対象者	性別	最終学歴	校種	養成課程	大学における保健科教育法の履修	教育実習における保健授業の経験	非常勤講師における保健授業の経験	保健授業に関する公的研修の経験	該当年度の担当授業	保健授業について相談できる同僚の有無
教諭A	女性	学部卒	中学校	教員養成学部	○	○	×	×	中 1×2 中 2×1 中 3×2	×
教諭B	女性	院卒	中学校	教員養成学部	○	○	○	×	中 1×1 中 2×2 中 3×1	○
教諭C	女性	学部卒	高校	一般学部	○	○	×	○	高 1×1	○
教諭D	男性	院卒	高校	教員養成学部	○	○	○	○	高 2×1	○

3. 調査方法及び調査内容

調査方法について、各対象者に対して、Web会議システム Zoom を用いた半構造化インタビューを実施した。調査時期は、新規採用1年目の各学期の終了後(①2020年8月、②2020年12月、③2021年3月)であり、各対象者につき計3回インタビューを実施した。

まず、新規採用1年目の各学期後に調査を実施した理由として、多くの先行研究において、初任教諭の成長・変容について論じられており(例えば、斎藤ほか、2009;坂本、2007;都丸ほか、2010)、その成長・変容の様子を見取るためにも、縦断的に調査を行うことが重要であると考えられたからである。この新規採用後1年間の継続的なインタビューについては、質問項目が記されたインタビューガイド(表2)に基づいて実施された。インタビューガイドは、加登本・辻(2020)を参考に、著者間で協議を重ね、作成した。インタビュー内容はiPhoneのボイスメモに録音した。

表2 インタビューガイド

1. 属性(初回のみ)
・勤務校、養成課程の種類、大学における保健科教育法履修の有無など
2. 担当授業の概要(初回のみ)
・昨年度までに担当した保健授業の概要【昨年度までに教員経験のある者のみ】
・今年度担当している保健授業の概要
3. 「主体的・対話的・深い学びの実現」に関する悩み事
・当該学期に実施した保健授業の概要
・当該学期に実施した保健授業に関する「主体的・対話的で深い学びの実現」という側面の悩み事

4. 分析方法

インタビューの音声記録から作成した逐語録について、質的分析法であるSCAT(大谷、2019)を用いて分析を行った。SCATは、マトリクスの中に切片

化したデータを記述し、それぞれに〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉〈1〉を言い換えるためのデータ外の語句、〈3〉〈2〉を説明するための語句、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していくコーディングと、〈4〉を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する質的分析法である。SCATは比較的小規模なデータにも適応可能であるため、対象者が4名である本研究の分析に用いることとした。

また、SCATを用いている佐藤・相良(2021)の方法を参考に、SCATによる分析から得られた理論について、本研究の分析の視点、すなわち、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」に即して、対象者毎・学期毎に分類した。その際、複数の視点に関連する理論があることが確認されたため、それらの理論については、双方の視点に含めることとした。加えて、本研究の分析の視点のいずれにも分類が困難な理論は、「その他」に分類した。

さらに、分析の内的妥当性を高めるための手立てとして、「メンバー・チェック」及び「仲間同士での検証」を実施した(メリアム、2004)。具体的には、「メンバー・チェック」について、逐語録の作成後及び分析結果の創出後の計2回、各対象者に分析の過程を提示した。なお、「メンバー・チェック」に伴う修正は無かった。他方、「仲間同士での検証」について、筆頭著者が分析を実施した上で、各対象者の分析結果が創出される度に、共同著者に対して意見を求めた。共同著者が修正の必要性を感じた箇所については、著者間で討議し、修正を行った。

5. 倫理的配慮

調査の実施前に、対象者に対し、研究目的や研究内容、成果公表時の留意事項などについて、書面にて説明した。また、インタビュー内容を録音することについても説明を行い、これら全ての事項に対して同意を

得た上で調査を実施した。

Ⅲ 結果

4名に対するインタビューから得られた逐語録について、SCATを用いて分析し、得られた理論を表3及び表4に示した。なお、本章及び次章において、【】内はSCATによる分析の過程で生成された構成概念を示している。

Ⅳ 考察

1. 「主体的な学び」の実現に関連する悩み事

全ての対象者は共通して、「主体的な学び」の実現に関連する悩み事を抱えていた。また、教諭A及び教諭Bにおいては、1年間、「主体的な学び」の実現に関する悩み事が継続していた。加登本・辻(2020)では、若手小学校教員が保健授業で最も困難に思っていることとして、「主体的な学び」が挙げられた。このことから、初任保健体育科教諭を対象とした本研究においても、先行研究と類似した結果が得られたといえよう。また、岩田ほか(2012)の量的な調査において、保健体育科教員は、教員歴を問わず、生徒の興味を引き出す保健授業の実施に難しさを感じていることが明らかにされている。本研究の結果から、初任保健体育科教諭における具体的な「主体的な学び」の実現に関連する悩み事の実態として、次の2点が考えられた。

1点目は、授業導入の工夫による生徒の興味・関心の喚起についての悩み事である。「主体的な学び」の提唱により、生徒の興味・関心を重視する方向性は一層明確化されたという(埜崎, 2021)。しかしながら、例えば、教諭Bは【導入に対する苦手意識】を抱えており、インタビューの分析から、【導入において学習の必然性を理解させることによる意欲の継続】という構成概念が生成された。また、教諭Cのインタビューでは、【導入における生徒の興味を引く発問】に関する悩み事が語られた。

保健学習授業推進委員会(2013)は、保健授業に対する生徒の学習意欲に関わって、知的な興味・関心を高めるような授業づくりの必要性を指摘しているが、このような生徒の興味・関心を高める役割を担っているのは、授業における導入であると考えられる。友部(2020)も、各授業の導入において単元の学習課題を確認しながら、明確な意図をもった発問・活動によって、生徒がその後の授業に主体的に参加する可能性を指摘している。このような生徒の「主体的な学び」の実現に資する授業の導入について、初任保健体育科

教諭は自身の力量不足から、悩んでいる実態が窺えた。

2点目は、授業の中心となる課題の設定についての悩み事である。教諭Bのインタビューでは、【生徒の関心を向上させる課題及び導入の検討】に関する悩み事が語られた。また、教諭Dのインタビューの分析からは、【生徒が主体的に取り組む課題の設定】という構成概念が生成された。生徒が主体的に取り組むためには、知識の教授だけでなく、生徒が自ら考えたいくなるような課題が必要であると思われる。しかしながら、今回のインタビューからは、各授業において、そのような課題を設定すること、あるいは、単元を通じた課題を設定することに、初任保健体育科教諭が悩んでいることが推察された。岩田ほか(2012)では、「主要科目でないため、なかなか本気で学習してくれない」(p.154)という悩み事を抱える保健体育科教員の存在が明らかになっている。一方、本研究の対象者においては、悩みの原因を自らの力量不足という自責思考にしている点に特徴があった。森(2015)は、生徒が意欲的に学ぶためには、「保健の授業はおもしろい・楽しい」と親や仲間に語るような状況をつくりださなければならず、そのためにまずは、授業者である教員が「授業はおもしろい・楽しい」と考え、取り組むようにしなければならぬと指摘している。このことを踏まえながら、初任保健体育科教諭は、【授業者の授業内容に対する興味・関心の重要性】を認識し、授業の導入及び授業の中心となる課題を工夫する必要があると考えられる。

2. 「対話的な学び」の実現に関連する悩み事

初任保健体育科教諭の抱える「対話的な学び」の実現に向けた悩み事は、「主体的な学び」及び「深い学び」と比較すると少なかった。また、1年間を通して継続された「対話的な学び」の実現に向けた悩み事はなかった。加登本・辻(2020)においても、小学校教員全般の「保健授業で困難に思っていること」として、「主体的学び」、「深い学び」に次いで「協働的学び」が挙げられているが、初任保健体育科教諭を対象とした本研究においても、類似した結果が得られたと捉えることができよう。その中で、「対話的な学び」の実現に関連する悩み事の実態として、大きく2点が挙げられた。

1点目は、コロナ禍における「対話的な学び」についての悩み事である。本研究は、新規採用と同時に新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受けた初任保健体育科教諭を対象としたため、このような悩み事が表出したと考えられる。具体的には、【コロナ禍において求められたグループ活動の制限】が挙げられる。鈴木(2022)はコロナ禍による影響について、グ

表3 「主体的な学び」及び「対話的な学び」に関する悩み事の理論の分類

		1 学期	2 学期	3 学期
主体的な学び	教諭 A	○初任保健体育科教諭は、【授業における生徒の思考不足の実感】と【主体的に学習に取り組む態度の欠如】による【授業を通じた学びの欠如】について悩む。	○初任保健体育科教諭は、【2 学期の保健授業実践における悩み事】として【1 学期から 2 学期にかけての継続した悩み事】である【主体的に学習に取り組む態度が欠如した生徒に対するアプローチ】を挙げる。	○初任保健体育科教諭は、【主体的に学習に取り組む態度が欠如した生徒に対するアプローチの困難さ】を感じる。 ○初任保健体育科教諭は、【主体的に学習に取り組む態度が欠如した生徒】について【年間を通した成長の実感】があると考える。
	教諭 B	○【一人も取り残さない導入の検討】が必要であるとする初任保健体育科教諭は、「運動と健康」の授業において【生徒の雰囲気から直前に判断した導入の変更】を行うが、【部活動に所属する生徒のコロナ禍による運動習慣の変化】がある一方、【運動部活動に所属しない生徒のコロナ禍による運動習慣の変化のなさ】があるため、【導入における関心の非向上】につながると考える。 ○初任保健体育科教諭は【授業者による生徒の主体的に学習に取り組む態度に関する学習評価】について、【一人も取り残さない導入の実施不可能性】から、【個別最適な学習の追求】が必要だと考える。	○初任保健体育科教諭は、【生徒の関心を向上させる課題及び導入の検討】に関する悩み事を抱える。	○初任保健体育科教諭は、【3 学期の保健授業実践における悩み事】として【導入において学習の必然性を理解させることによる意欲の継続】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、生徒に【導入における学習の必然性に関する説明に対する不満】があれば、進んで学習に取り組むことは難しいと考える。 ○初任保健体育科教諭は、生徒の【授業者の授業に対する興味・関心の低さの察知】から、保健授業には【授業者の授業内容に対する興味・関心の重要性】があると考える。
	教諭 C	○初任保健体育科教諭は、【1 学期の保健授業実践における悩み事】として【指導教員からの助言による生徒の意欲を喚起するための導入における目標の明確な提示】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、【導入における生徒の興味を引く発問】を意識するものの、【導入に対する反省】をする。		○初任保健体育科教諭は、【生徒の意欲喚起における困難】を踏まえて【発問の頻度の低さに対する反省】を述べる。
	教諭 D	○初任保健体育科教諭は、【生徒が主体的に取り組む課題の設定】や【深い学びの実現に資する課題の創出】が必要であるとする。	○初任保健体育科教諭は、【2 学期の保健授業実践における悩み事】として、【主体的に学習に取り組む態度の欠如】と【生徒の関心を持続させるための工夫】を挙げる。	
対話的な学び	教諭 A		○初任保健体育科教諭は、【対話的な学びの実現に向けた生徒に対する授業外のアプローチ】について悩む。 ○初任保健体育科教諭は、【コロナ禍において求められた講義形式の授業からの解放】に伴う【対話的な学びの質】を確保するための【対話的な学びにおける活発な意見交流の実現】について悩む。	
	教諭 B	○初任保健体育科教諭は、【コロナ禍において求められたグループ活動の制限】について悩む。		
	教諭 C			○初任保健体育科教諭は、【3 学期の保健授業実践における悩み事】として、【講義形式の授業における対話的な学びの少なさ】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、【生徒の回答から授業を展開する力量の不足】を感じ、【対話的な学びの実現という理想とのギャップ】に悩む。
	教諭 D			

グループでの話し合い活動に制限がかかっていることが大きいと述べている。さらに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収まってきても、新たに【対話的な学びにおける活発な意見交換の実現】に関する悩み事を抱いていた。これは、コロナ禍において、初任保健体育科教諭も、そして生徒も、グループ活動のある保健授業を経験していないため、何をどう話し合わせたらいのか、あるいは、何をどう話し合ったらいいのか、ということがわからない状況が生まれたことが背景として考えられる。このような状況は、仲井 (2022)

においても報告されており、河村ほか (2021) は、「対話を重視する新たな学習指導要領に基づいた教育実践と、人との接触・密を避ける新型コロナウイルスの感染予防の徹底とのバランスをどうとって成果をあげていくのか、『正解』も見えない中、試行錯誤をしている状態」(p.222)と表現している。このような未曾有の状況における「対話的な学び」の実現について、初任保健体育科教諭は悩み事を抱えていると考えられた。

2 点目は、生徒—生徒間、あるいは、生徒—教員間の対話に関する悩み事である。例えば、教諭 B の話

表4 「深い学び」及び「その他」に関する悩み事の理論の分類

		1 学期	2 学期	3 学期
深い学び	教諭 A	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【生徒の資質・能力の育成に対する自信のなさの払拭】のために【生徒の思考を促す方法の模索】を行う。 ○初任保健体育科教諭は、【授業における生徒の思考不足の実感】と【主体的に学習に取り組む態度の欠如】による【授業を通した学びの欠如】について悩む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【知識獲得場面と思考・判断・表現場面の使い分け】について、【知識獲得場面における深い学びの実現の困難さ】を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【3 学期の保健授業実践における悩み事】として、【深い学びの実現に対するアプローチ】を挙げる。
	教諭 B	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【1 学期の保健授業実践における悩み事】として【深い学びの実現につながる授業導入における生徒の関心の向上】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭が、【導入の出来による学習の雰囲気醸成】の具体例として、【薬物乱用の授業における生徒の思考の揺さぶり】に触れつつ、【生徒の関心を掴んだ際の思考の活発さ】と【生徒の関心を掴めなかった際の思考の不活発さ】を挙げた背景には、【メンターによる導入の重要性に関する助言】がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【生徒の思考場面の設定に関する課題】を解決するために【単元を通した中心的課題の設定と接近】を行う。 ○初任保健体育科教諭は、保健授業では【授業時間数の制約を踏まえた学習内容の厳選の必要性】があるため、【知識獲得場面と思考・判断・表現場面の使い分け】が重要であると考ええる。 	
	教諭 C			
	教諭 D	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【まとめの課題における面白みのなさや授業とのつながりのなさ】について悩む。 ○初任保健体育科教諭は、【生徒が主体的に取り組む課題の設定】や【深い学びの実現に資する課題の創出】が必要であると考ええる。 		<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【3 学期の保健授業実践における悩み事】として挙げた【目標と関連させた生徒の思考活動】と【授業で取り組む課題の内容の設定】について、【複数クラスを担当することによる授業改善のメリット】により解消されると考える。
その他	教諭 A	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【1 学期の保健授業実践における悩み事】として、【コロナ禍において求められた講義形式の授業】における【教師としての力量不足】を挙げる。 		
	教諭 B	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【一人も取り残さない導入の視点からの比較】による【導入の変更に対する反省】をする。 ○初任保健体育科教諭は、【授業で取り組む課題内容の設定】について悩む。 ○初任保健体育科教諭は、【個の学びから全体の学びに広げる際の時間配分に対する反省】をする。 ○初任保健体育科教諭は、【授業者による授業評価】について、【授業毎に異なる手応え】を感じる。 ○初任保健体育科教諭は、【授業毎になる手応えの要因】を【生徒の関心の向上】であると考ええる。 ○初任保健体育科教諭は、【最低限身に付けさせたい知識の獲得につながる関心の向上】の重要性について語る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【2 学期の保健授業実践における悩み事】として【授業で取り組む課題内容の設定】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、保健授業には【単元を通した課題内容の設定の困難さ】があると考ええる。 ○初任保健体育科教諭は、保健授業では【最低限身に付けさせたい知識の獲得につながる指導】が必要であると考ええる。 ○初任保健体育科教諭は、【授業者による課題及び導入に関する授業評価】について、【良い／悪いの割合が五分五分である課題及び導入】であると考ええる。 ○初任保健体育科教諭は、保健授業では【良い導入の引き出しの増加】と【次年度以降における良い導入の継続活用】が重要であると考ええる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【導入に対する苦手意識】を抱いている。
	教諭 C	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【導入の話から目標へつなげる工夫】が必要であると考ええる。 ○初任保健体育科教諭は、【導入失敗時の授業者としての心境】として、【後戻りの出来なさに伴う後悔】を感じる。 ○初任保健体育科教諭は、【浅い知識の伝達及び自己の経験談の共有に対する違和感】から、【周到に準備した内容に限定した実施】をする。 ○初任保健体育科教諭は、【授業内容が整理できていないことによる授業者の混乱】を経験する。 ○初任保健体育科教諭は、【指導教員がいない教室における学習規律に対する不安】を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【2 学期の保健授業実践における悩み事】として【発問に対する生徒の回答へのリアクション】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭には、【想定外の回答に対する戸惑い】があるため、【想定外の回答に対応するための発問の事前検討】をするが、【生徒の回答がない場合の想起と発問の躊躇】がある。 ○初任保健体育科教諭は、【夏休み明けの生徒の実態】から【教室の騒がしい雰囲気】に悩む。 ○初任保健体育科教諭は、【教室の騒がしい雰囲気による弊害】として【学習規律の徹底】を挙げる。 	
	教諭 D	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【1 学期の保健授業実践における悩み事】として【生徒の反応の曖昧さによる授業の質に対する不安】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、【生徒との人間関係に対する自信のなさ】や【授業実践力に対する自信のなさ】を感じる。 ○初任保健体育科教諭は、【教員歴の短さと教材研究不足】から【授業観察と教材研究の重要性】に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初任保健体育科教諭は、【ワークシートの穴埋めの意図】として【定期考査との兼ね合いを考慮した判断】を挙げる。 ○初任保健体育科教諭は、【環境に関する単元における授業実践の難しさ】を感じる。 ○初任保健体育科教諭は、【手抜き授業に対する葛藤】を抱え、【初任教諭の抱える授業に対する理想と現実のギャップ】に悩む。 	

りから、【対話的な学びにおける活発な意見交流の実現】という構成概念が生成された。また、教諭Cに対するインタビューの分析の結果、「初任保健体育科教諭は、【生徒の回答から授業を展開する力量の不足】を感じ、【対話的な学びの実現という理想とのギャップ】に悩む」という理論が生成された。そもそも「対話的な学び」は、グループワークやディスカッションといった外形的な言語活動よりも、他の人や物、あるいは自己との対話による、生徒個人の思考の内的な発展を重視している（前嶋，2021）。そのため、「対話的な学び」では、生徒—生徒間の対話に留まらず、生徒—教員間の対話からも、新たな思考が生まれているかどうかが問われる（埜崎，2021）。しかしながら、本研究の結果からは、生徒同士の対話を活発にすること、並びに、思考を促す発問に対する生徒の予想外の回答への反応について、初任保健体育科教諭は悩んでいることが窺えた。

3. 「深い学び」の実現に関連する悩み事

「深い学び」の実現に関連する悩み事は、「主体的な学び」及び「対話的な学び」とは異なり、1年間悩み続けた対象者がいた一方で、全く悩み事を抱えない者もいた。まず、「深い学び」についての悩み事の実態として、大きく3点考えられた。

1点目は、授業導入の工夫である。例えば、教諭Bはインタビューにおいて、【生徒の関心を掴んだ際の思考の活発さ】と【生徒の関心を掴めなかった際の思考の不活発さ】に触れている。つまり、授業導入において、生徒の関心を掴む事が「深い学び」の実現につながると捉えている一方で、そのような導入を実施することに難しさを感じていた。

2点目は、授業の中心となる課題の設定である。教諭Dは、【深い学びの実現に資する課題の創出】について、また、教諭Bは【単元を通した中心的課題の設定と接近】についての悩み事を抱えていた。井上(2021)は、生徒の「深い学び」につなげるために、単元の内容の配列が重要であると指摘している。しかしながら、単元全体を見通して課題を設定することに対し、初任保健体育科教諭は悩んでいるようであった。

3点目は、生徒が知識を習得する場面についてである。例えば、教諭Aのインタビューの分析から、【知識獲得場面における深い学びの実現の困難さ】という構成概念が生成された。すなわち、教諭Aは、知識を獲得する場面において、「深い学び」を実現させようと悩んでいると捉えられる。しかしながら、「深い学び」は習得・活用・探究の過程の中で実現されるものであるため（文部科学省，2017）、知識を獲得する

場面と、それを基に生徒に思考させる場面を一体として捉えることが重要であろう。

他方で、悩み事を抱えていなかった対象者に着目してみると、四方田・岡出（2020）は体育の文脈において、「もっとも、体育指導の自信や不安の自覚は実際の指導力を反映するものとは限らない。体育指導に対する関心がそもそも低く、現状に問題意識を感じないために不安も感じないという教師の存在も懸念される」（p.13）と述べている。そもそも「深い学び」は、「主体的な学び」及び「対話的な学び」に比べ、どのように実現できるのか、指導方法も子どもの姿もイメージしにくいといわれる（土佐ほか，2021）。加登本・辻（2020）によって、小学校若手教員は、小学校中堅教員・熟練教員と比較して、保健授業における「深い学び」の実現に対する困難を抱えていることが明らかにされている。その中で、本研究では、同時期に新規採用された初任保健体育科教諭内においても、「深い学び」に関する悩み事には、個人差があることが明らかとなった。この背景として、「深い学び」に関する悩み事を抱えていなかった教諭Cは、導入における目標の提示、発問頻度や発問に対する生徒の回答への反応といった、基礎的な教授技術に関する悩み事を多く抱えていたことが考えられる。つまり、初任教諭の意識や資質・能力には個人差が見られるため（山田・榎，2021）、「深い学び」というイメージしづらいものに対して、問題意識を感じていなかったと捉えられよう。

V 総合考察

ここまで、保健授業における「主体的学び」、「対話的な学び」、「深い学び」それぞれについて、初任保健体育科教諭が抱える悩み事の実態を検討してきた。最後に、これらの悩み事の実態について、新規採用後1年間の変化を総合的に検討したい。

まず、新規採用後1年間の悩み事の質的变化である。本研究においては、大きく2点のパターンが見られた。

1点目は、教諭Aの【主体的に学習に取り組む態度の欠如】に関する一連の悩み事のような、1年間を通して解決されない、継続的なパターンである。自らの実践力が十分でないという認識を持っている若手教諭が多い中で、職場での校内研修や教育行政主催の研修だけでは多様な学びを得ることは難しいとされる（阿曾・須田，2020）。さらに、この年は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、初任者研修のほとんどがオンラインで実施され、初任教諭が集まって研修を行う機会が少なかったという。そのため、1年間継続されるような悩み事を軽減させるためには、

公的な研修や初任教諭の自助努力のみならず、校内外で気軽に意見を出し合える機会を、意図的・継続的に設定していくこと（中妻，2021）が重要であろう。

2点目は、新たな悩み事が出たり、さらに悩み事が深まったりするパターンである。例えば、教諭Bは、1学期において、【コロナ禍において求められたグループ活動の制限】をはじめとする、実際に授業を行う際の多様な悩み事を抱えていた。しかしながら、2学期には【単元を通した中心的課題の設定と接近】や【授業時数の制約を踏まえた学習内容の厳選の必要性】、【次年度における良い導入の継続活用】といった、1学期には全く表出されなかった、より広い視野における悩み事を抱えるようになっていた。このことから、新規採用年度当初には、教室における保健授業実践といったミクロな悩み事が中心であり、徐々に単元や次年度を見通した、マクロな悩み事に変化する可能性が窺えた。このような刻々と変化する悩み事を軽減させるためには、本研究におけるインタビュー調査のように、定期的に悩み事を他者に聞いてもらうことが重要であろう。なぜなら、初任教諭は、研究やインタビュー調査で自分の言葉で語ることで、自分の強みやよさを実感し、教員としての仕事に自信を持つようになるからである（松田・安井，2021）。

次に、新規採用後1年間の悩み事の量的変化である。統計的な分析を実施したわけではないが、表3及び表4から、学期を経るにつれ、インタビューの分析から生成された構成概念及び理論の数が減少していることが読み取れる。特に1学期終了時点において、初任保健体育科教諭は多くの悩み事を抱えていることが窺えた。一般に、初任教員は着任前に「漠然とした不安」を抱え、着任直後1ヶ月で「生徒、同僚、保護者等との関係」、その後から「職務に関する自己のイメージと現実とのギャップ」に関して悩むという（斎藤ほか，2009）。この悩み事と同様に、初任保健体育科教諭の抱える保健授業に関する悩み事も、1年間という短いスパンにおいて、質的にも、そして量的にも、変化すると考えられる。そのため、初任教諭の抱える悩み事については、「若手期」あるいは「初任期」と一括りにせず、より短い期間における悩み事を把握し、各時期に応じた支援、あるいは、初任者研修などの公的研修を構築していくことが必要であろう。

VI まとめと今後の課題

本研究の目的は、初任保健体育科教諭が抱える保健授業についての悩み事の実態を、質的研究法を用いて事例的に明らかにすることであった。本研究の結果、

以下の5点が明らかになった。

- 1) 初任保健体育科教諭は、保健授業における「主体的な学び」に関連して、授業導入の工夫による生徒の興味・関心の喚起及び授業の中心となる課題の設定について、悩み事を抱えている。
- 2) 初任保健体育科教諭は、保健授業における「対話的な学び」に関連して、コロナ禍における「対話的な学び」、並びに、生徒－生徒間及び生徒－教員間の対話について、悩み事を抱えている。
- 3) 初任保健体育科教諭は、保健授業における「深い学び」に関連して、授業導入の工夫や授業の中心となる課題の設定、生徒が知識を習得する場面について、悩み事を抱えている。
- 4) 初任保健体育科教諭が抱える保健授業についての悩み事は、新規採用後1年間で、教室における保健授業実践といったミクロな悩み事から、単元や次年度を見通したマクロな悩み事に変化する傾向がある。
- 5) 初任保健体育科教諭が抱える保健授業についての悩み事は、着任直後の1学期が最も多く、新規採用後1年間で減少する傾向がある。

本研究の課題として、まず、対象者の少なさ及び対象者の勤務する学校が特定の地域に限定されていたことが挙げられる。本研究では、対象者全員がX県の中学校及び高等学校に勤務していたため、今後は他の地域に勤務する教諭についても検討する必要があるといえよう。次に、他教科の初任教諭や新型コロナウイルス感染症感染拡大前後に新規採用された初任保健体育科教諭の悩み事について調査・比較ができなかったことである。そのため、本研究で表出された悩み事が、保健授業特有のものなのか、また、コロナ禍に関わらない初任保健体育科教諭に共通のものなのか、ということについて明らかにすることができなかった。そして、加登本ほか（2010）において、体育指導に積極的に関与している教員と比較して、そうでない教員は全般的に体育授業に関する悩み事の認知が高いことを示している。本研究では、保健指導に積極的に関与している教員こそ、悩み事の認知が高い可能性が窺えた。本研究の対象者4名は全員が保健の授業改善に関心の高い教員であったため、今後はこのような教員に対する支援方策を検討するとともに、関心に低い教員に対する悩み事についても調査する必要がある。

【注】

- 1) 本研究では、教育職員免許法に依拠し、学校に勤務し教育に従事している者を「教員」、そのうち、

正規採用の教員を「教諭」と表記する。

- 2) 本研究では、文部科学省の示す資料を参考に、教員の能力や態度、性質などの総称については、中黒なしの「資質能力」、児童生徒のものについては、中黒ありの「資質・能力」と表記する。
- 3) 加登本・辻 (2020) 及び岩田ほか (2012) は、教職経験年数が1年目から5年目を「初任」と定義している。しかしながら、これは教職経験年数から、「初任」、「中堅」、「熟練」という3つのカテゴリー分けを行うために用いられている定義であり、欧米の教育分野における研究 (例えば、DeMink-Carthew et al., 2017; Lofstrom et al., 2009) でいうところの「novice」という用語に当たる。他方で、日本においては、「初任者研修」という研修が広く知れ渡っているように、新規採用1年目を「初任」と呼称することが一般的であると考えられる。したがって、本研究では、新規採用1年目を「初任」と定義し、加登本・辻 (2020) や岩田ほか (2012) をはじめとする先行研究における「初任」は、便宜上「若手」と表記する。

【文献】

- 阿曾奈生・須田康之 (2020) 職場外におけるノンフォーマル学習による教師の学びに関する考察—学生期から初任期への移行に着目して—。学校教育コミュニティ, 10 : 42-45.
- DeMink-Carthew, J., Grove, R. and Peterson, M. (2017) The influence of the core practices movement on the teaching and perspectives of novice teacher educators. *Studying Teacher Education*, 13(1): 87-104.
- 保健学習授業推進委員会 (2013) 保健学習授業推進委員会平成25年度報告書「中学校の保健学習を着実に推進するために」。https://www.gakkohoke.n.jp/book/ebook/ebook_H250010/H250010.pdf. (参照日2023年7月28日).
- 井上哲志 (2021) 探究的学習を通じた、グローバル社会に生きてはたらく資質・能力の育成—教科の見方・考え方を生徒が活用できる、深い学びの提案—。滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要, (63) : 2-9.
- 岩田昌太郎・加登本仁・松田泰定・木原成一郎・徳永隆治・林俊雄・久保研二・村井潤・嘉数健悟・林楠・藤本翔子 (2012) 保健体育科教師の悩み事に関する調査研究。学校教育実践学研究, 18 : 151-158.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟 (2010) 体育授業の悩み事に関する調査研究 (その1) —教職経験に伴う悩み事の差異を中心として—。学校教育実践学研究, 16 : 85-93.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟 (2011) 体育授業の悩み事に関する調査研究 (その2) —悩み事の解決方法を中心として—。学校教育実践学研究, 17 : 169-174.
- 加登本仁・辻延浩 (2020) 小学校教師の保健授業に関する悩み事についての調査研究—教職経験年数及び保健に対する関心による差異に着目して—。滋賀大学教育学部紀要, (69) : 27-34.
- 河村茂雄・田島充士・牧郁子・高橋幾・長しのぶ・井原啓裕・富崎直志・藤倉憲一 (2021) コロナ状況下において学校は対話的な学びをどう展開していくのか—子どもたちの成長を支えるために教育心理学が貢献できることは—。教育心理学年報, 60 : 216-227.
- 木原成一郎・磯崎尚子・磯崎哲夫 (2003) 教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究。日本教科教育学会誌, 25 (4) : 29-38.
- 木原成一郎・重見典孝・松田泰定 (2004) 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究 (その2)。学校教育実践学研究, 10 : 1-10.
- 木原成一郎 (2006) 初任者研修段階における体育授業の心配に関する事例研究。「実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究」科学研究費補助金 (基盤研究B) 研究成果報告書, 66-73.
- 小村俊平 (2020) : 私たちはコロナ禍にどう向き合い、何を学んだか? —全国の教員との「生徒の気づきと学び」を最大化するオンライン対話から—。コンピュータ&エデュケーション, 49 : 14-18.
- Lofstrom, E. and Eisenschmidt, E. (2009) Novice teachers' perspectives on mentoring: The case of the Estonian induction year. *Teaching and Teacher Education*, 25(5): 681-689.
- 前嶋深雪 (2021) 新学習指導要領「話すこと聞くこと」の意義と役割—エコロジカルアプローチ及び「対話的な学び」「キャリア教育」に関連して—。明治大学教職課程年報, 43 : 33-42.
- 松田和也・安井智恵 (2021) 若手教師育成とミドルリーダーの役割—若手教師の実態把握と校内初任段階教師研修の取組を通して—。北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要 教職大学院研究紀要, 11 : 43-57.
- メリアム・堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー, ミネルヴァ

- 書房。
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編. 東山書房.
- 森昭三 (2015) 保健科教育のこれまでとこれから—研究者としての自省から—. 体育科教育, **63** (9): 10-13.
- 長岡知 (2020) 保健科の教師教育論②—教育実習の現状と課題—. 今村修ほか編著, 保健科教育学の探究—研究の基礎と方法—. 大修館書店, pp.58-62.
- 中川明・高橋裕子 (2010) 保健体育の教師はなぜ保健の授業が苦手なのか?—保健体育科専攻学生の教材・内容・授業観からの検討—. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, **35**: 63-73.
- 仲井勝巳 (2022) 大学教職課程「理科」及び「理科教育法」の授業に関する研究—新型コロナウイルス影響下の取組から—. 尚美学園大学総合政策論集, (34): 35-48.
- 中妻佳代 (2021) 若手教員の教師力向上に関する取組の開発と実践. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, **35**: 205-213.
- 埜寄志保 (2021) 主体形成としての対話に関する考察 (1) —「主体的・対話的で深い学び」の批判的検討—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学, **68** (1): 25-37.
- 野津有司 (2020) 保健科教育研究の必要性. 今村修ほか編著, 保健科教育学の探究—研究の基礎と方法—. 大修館書店, pp.7-11.
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで—. 名古屋大学出版会.
- 坂本篤史 (2007) 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, **55** (4): 584-596.
- 斎藤俊則・都丸けい子・大野精一 (2009) 初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究 (その1). 教育総合研究, **2**: 135-144.
- 佐藤有香・相良順子 (2021) 熟練保育者における「子ども理解」に変化をもたらす契機についての質的研究—保育実践の振り返りの語りから—. 教師学研究, **22** (2): 47-57.
- 鈴木秀樹 (2022): ポストコロナ時代を見据えて. 鹿毛雅治ら:「主体的・対話的で深い学び」を問う—ポスト・コロナの授業に向けて—. 教育心理学年報, **61**: 254-266, 2022.
- 都丸けい子・斎藤俊則・大野精一 (2010) 初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究 (その2). 教育総合研究, **3**: 119-137.
- 友部智予 (2020) 単元を貫く学習課題を設定し, 地理的な見方・考え方を働かせて学ぶ社会科授業の工夫—単元導入における資料の提示と発問に焦点をあてて—. 帝京大学大学院教職研究科年報, (11): 170-171.
- 土佐幸子・星ありさ・高野和明 (2021) 教科書の「資料」を「深い学び」につなげる小学校理科授業の開発研究. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, **13** (2): 343-350.
- 上地勝 (2020) 保健科教育学の構築. 今村修ほか編著, 保健科教育学の探究—研究の基礎と方法—. 大修館書店, pp.18-29.
- 山田淳子・辻延浩・仁賀志織・足立光憲・沖本由佳里 (2020) 中学校保健体育科教員の授業力量形成に関する研究—キャリアステージの異なる教師に対するアクション・リサーチの実践から—. 滋賀大学教育学部紀要, (69): 1-15.
- 山田芳幸・榎景子 (2021) 初任・若手教師の育成を中核にした育ち合う組織づくりに関する研究. 長崎大学教育学部教育実践研究紀要, **20**: 115-124.
- 四方田健二・岡出美則 (2020) 小学校教師の体育授業に対するコミットメントを阻害する要因の質的研究. 日本教科教育学会誌, **42** (4): 11-23.
- 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師 アクターとしての教師. 金子書房.